

感謝箱献金だより

ガリラヤのほとり 25 号

感謝箱献金事務局（コア）〒221-0852 神奈川県横浜市神奈川区三ツ沢下町 14-57 横浜聖アンデレ教会内
TEL/FAX 045-620-8282 E-mail:kansyabako@grace.ocn.ne.jp



感謝できない。でも、

京都教区主教 ステパノ高地 敬

先日の主日礼拝で、ルカによる福音書第 17 章の、10 人の人をイエス様が癒されるところを読みました。重い皮膚病で町のはずれでしんどい思いを持って生活していた人たちは、うわさのイエス様がこちらに来られることを知ると、近寄ることはできないので遠くから大声で叫びます。「憐れんでください。」イエス様は、その人たちに、「祭司たちの所に行って、体を見せなさい」、つまり、祭司に清くなったと宣言してもらいなさい、と言われます。10 人は早速行きますが、途中でもういやされたことを知ると、その中の一人は神様を賛美しながら引き返して来て、イエス様にひれ伏して感謝します。イエス様は、「この外国人の他に、神を賛美するために戻ってきた者はいないのか」と言われました。

イエス様にいやされた 10 人とも、ものすごくうれしかったはずですが、感謝したのはたった一人のそれも外国人だけでした。この話から私たちは、何かしてもらったらちゃんと感謝の言葉を心から言うことの大切さを学びます。特に神様からは毎日本当にたくさんものをいただいているので、感謝の気持ちをいつも忘れないようにと考えます。ただ私たちは、教会や家庭での祈りの中で神様に感謝の言葉は言っているし、クリスチャンとして感謝ということくらいは何となくできているようにも思います。

人が集まると必ず真中ができ、必ず端っこができます。中にいるということは、端っこにいる人があるということです。町の中には多くの人たちがいて、10 人の人たちは端っこに追いやられていました。同じように、私たちの生活が世界から見るととても豊かであるのは、豊かでない人たちの存在があるからこそではないでしょうか。少し厳しい言い方をすると、世界の貧しい人たちを踏みつけにして、私たちの豊かさが成り立っている。けれども、そんな人たちの存在を大体忘れている私たち。イエス様の所に引返して感謝しなかったのは 10 人のうち 9 人でした。感謝するのはとても難しいということが、「10 分の 9」という数字で言われているのだと思います。私たちは大体感謝できていない。お祈りの中で神様に感謝し、また日ごろお世話になっている人たちに感謝することはあっても、私たちが踏み台にしている人たちには感謝していないと言ったら言い過ぎでしょうか。

9 人は戻ってきませんでした。イエス様は、「ほかの 9 人はどこにいるのか」と言われるだけで、もちろんその 9 人のためにも十字架にお掛りになりました。この 9 人のように、誰に感謝しないといけないのかも、ちゃんと分からないような私たちのこともイエス様は祝福しようとしてくださっておりました。そうであればこそ、さまざまな支援を感謝の気持ちを持ってすることができれば素晴らしいのだと思います。

(10 月初旬執筆稿より)

恵みの風を受けて



お献げ先からの報告のコーナーです。今回は「リフレッシュ・プログラム」
「ニームの会」「聖地ろうあ子どもの里」「リグリマ・ジャパン」の近況をお伝えいただきます。

ニームの会

～南インドの WOLD を訪ねて～

ニームの会 代表 山下明子



南インドのダリット女性運動と連帯するニームの会では、2000 年を第一回としてほぼ隔年にインドの WOLD (Women's Organization for Liberation and Development) を訪ねてきました。

今年も 8 月に現地への研修ツアーを行い、感謝箱献金から頂いた献金を WOLD の農村センターで代表のプレマ・シャンタ・クマリに手渡すことができました。

ご支援に心よりお礼を申し上げます。

今回のツアーは諸事情で 3 人だけだったのですが、幸い、宮古聖ヤコブ教会の西平妙子司祭が初回につづいて参加して下さいました。インドのキリスト教会は日本基督教団にあたる北インド合同教会 (CNI) と南インド合同教会 (CSI) に組織されていますが、日本基督教団と異なって聖公会が歴史的に軸になって作られたので、主教座があります。WOLD の代表も出身は聖公会ですが、CSI とのつながりと葛藤の中で、ダリット女性だけの草の根の運動体をつくり、発展させてきました。

インドのクリスチアンの大半はダリットで、不可触制が廃止されて 65 年経つ現在も「賤民」視され、差別と暴力に晒されています。田舎のダリットの教会はほとんど無牧ですから、司祭や説教師がいくつもの教会を巡回します。今回、私たちが聖日礼拝に行ったのは WOLD 農村センターの近くの村のダリット教会でしたが、説教師のお話だけだったので、最後に西平司祭が祝祷をされました。また、礼拝後の交流会でも日本の賛美歌を歌って、とても喜ばれました。ちなみに私自身はこの村に何年も通って女性たちの面談調査をしてきましたので、教会にも顔見知りですが、彼女たちにとっても女性牧師による祝祷は初めての嬉しい経験でした。日本で女性司祭が誕生した経緯について私から少し説明しました。

WOLD はこれまでも報告させて頂いたように、インド政府の貧困女性対象の少額融資の施策である S.H.G. (自助グループ) つくりに 2000 年から参加してきました。自分の地区であるタミル・ナードゥ州ヴィルップラム県のメルマライアヌル地区 (人口約 18 万人の奥深い農村地帯、182 の大小の村落) にこれまでに全部で約 1500 の S.H.G. をつくって、ダリット女性と他カーストの貧困女性をつないできました。それまで宗教間、カースト間の暴力が絶えなかった危険な地域が WOLD の働きで大きく変化しました。この変化は何よりもダリットの子どもたち、女の子もほとんどが学校に通えるようになり、子どもたちの目が輝いていることからわかります。



ところが近年、WOLD のスタッフやワーカーが危険で村に入れない状況が続いています。S. H. G. に関わっていた NGO はキリスト教系の国際的な団体も含めて撤退し、S. H. G. はすべて政府の直接の管轄下にあります。WOLD は女性のエンパワーを目的としていますから、貯金と少額融資のためだけのトレーニングは行いません。しかし、借金の返済などで困ったグループや女性たちがセンターに相談に来ますから、センターの維持はどうしても必要です。

そこで、WOLD はニームの会の支援で、3 年前からセンターの広い土地を利用して野菜の自然栽培を始めました。昨年の冬は大洪水で被害が大きかったのですが、井戸に水が溜まったお蔭で、私たちが訪ねた時は、雨期なのに雨が降らずに困っていたものの、オクラやさまざまなマメ、雑穀類が実っていました。女性グループが土を耕して堆肥を入れたのですが、収穫も手作業にして、一人一人に 1 日 200 ルピーから 500 ルピーの日当を払っています。収穫を近隣の市場で売ってもこれらの日当で赤字ですが、WOLD の代表はセンターで寝泊まりして、野菜を食べて暮らし、畑を喜びながら管理しています。かつてのようにトレーニングに何百人が集う賑やかなセンターではなくなりましたが、自然栽培で豊かに実った土地に明日への希望を感じました。利益が得られるキノコ栽培についても勉強中とのことです。



収穫を待つばかりの野菜

今回はまた、私たちのツアー記念にココナッツの苗木を 3 本植えました。つい近年までココナッツはダリットの村には許されない「聖なる木」で、このセンターにもなかったからです。この木が大きく育って実を結ぶように、スタッフやワーカーの女性たちと祈りました。



ココナッツの苗木を植え、祈る、西平妙子司祭と WOLD スタッフの女性たち

「聖地ろうあ子どもの里」(HLID)

～ 関わりと今後の支援 ～

「HLID の子どもを支える会」日本代表 吉松さち子

(東京教区 聖オルバン教会信徒)



Br. Andrew の背中で甘える児童

2003 年 植田主教の時に東京教区にエルサレム教区協働委員会が発足、翌年植田主教を団長とする訪問団がエルサレムを訪問、両教区の協働関係がスタートしました。そして 2007 年 4 月、エルサレム教区の Suheil Dawani 主教の主教着座式で神崎雄二司祭が「聖地ろうあ子どもの里」の施設長 Br. Andrew と隣り合わせたことが機縁となり、現在につながる関係に発展しました。

同年の 9 月に神崎司祭と一緒に総勢 11 名で初めて HLID へ行きました。やったことは、教室の壁や天井のペンキ塗り、植木の剪定や花壇の整備、パソコンの修理、給食の準備、食堂の清掃、子どもたちとの交わりなどでした。その後 2008 年、2011 年にも訪問しました。

2013 年 7 月には、Br. Andrew を日本へ招待し、東日本大震災の被災地や東京・町田市の聾学校、滝乃川学園（国立市）、補聴器制作会社（国分寺市）等を訪問しました。

2014 年 4 月には、HLID 創立 50 周年記念式典があり、日本から 6 名の信徒が参加しました。同時に HLID 支援国会議が開かれ、わたしが出席しました。今年の 4 月には第 2 回目の支援国会議が開かれ、わたしの他に吉松英美、光益 彰（横浜山手聖公会）の 3 人が出席しました。

Br. Andrew の基本的な考えは、障がいを持っているからといって、子どもたちを特別視しないことです。例えば手話を特別な言葉と見るのではなく、手話語という英語やアラビア語と同じような数ある言語の一つだといいます。手話語を使いさえすれば、健常者と同じように意思疎通を行うことが出来るからです。教える教科もアラビア語、英語、算数、社会、理科、音楽、絵画、体育等の他にコンピューターの使い方まで手話語で教えています。



ブランコに乗る三重苦の少年に手を貸す耳の不自由な下級生

HLID の経営は、公的資金援助がないため、運営資金のほとんどは、内外の企業や団体、個人の寄付や献金です。その多くはヨルダンの他英米独仏、スイス、オランダなど欧米が中心です。

わたしたちが支援活動に関わるようになったのは、2008 年に行った時「年間一人 3 万円の献金で子どもの里親になって欲しい」といわれてからです。それ以来、この里親制度を中心に支援活動を続けていますが、まだ日も浅く、支援額も他国に比べればわずかなものです。



職業訓練所で刺繍に励む女性



難民キャンプで補聴器をつけて貰う少女



教室の授業風景～スカーフをしている二人の女性が先生

にもかかわらずわたしたちを支援国会議に呼んでくれるのは、遠いアジアから少しずつではありますが努力の積み重ねをしているからだと思います。そこでは日本聖公会婦人会が感謝箱献金の献金先として、2012 年から今日まで変わらぬご支援をしてくださっていることが大きな力となっています。

HLID を支援するのは、欧米だけではないというところに大きな意味があります。財政支援に加えて、今後求められるのが1年くらいの長期滞在ボランティアによる人的な支援です。欧米各国からは、長期滞在型ボランティアがこれまでもたくさん来ています。

長期滞在型ボランティアには、なにがしかの能力や技能、例えば会議の企画と実施、事務処理、IT 能力、外国語能力と事務折衝能力、営繕や樹木の剪定経験、子どもたちと一緒に遊んだり、世話をすることなどが期待されます。

今年の支援国会議以降、わたしたちは日本での理解促進を図るために「聖地ろうあ子どもの里」通信を発行することにしました。これまでほぼ毎月発行しています。中東地域には耳の不自由な人が今も 100 万人以上いるといわれます。

これまでのご支援に心からの感謝とお礼を申し上げますとともに、これからも「聖地ろうあ子どもの里」に対するご理解とご支援をお願い申し上げます。



The Holy Land Institute for the Deaf

「聖地ろうあ子どもの里」

里に暮らす子供たちの生活と学びを守るための、安定した資金援助を必要としています。ご理解とご協力をお願い致します。

振込先：ゆうちょ銀行 10050-45970211

エイチエルアイディーノ コドモヲササエルカイ

**毎年一定額の支援金で、継続的にサポートする
スポンサーシップ プログラム(里親制度)にご参加ください**

団体公式サイト <http://www.holyland-deaf.org>

☆「聖地ろうあ子どもの里」通信(日本語)の配信をご希望の方は、下記アドレスまでご連絡ください。

sarahyoshimatsu1515@jcom.zaq.ne.jp



いつもリグリマの活動に、励ましとご支援をいただきありがとうございます。

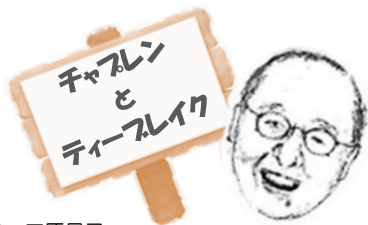
バングラデシュの治安状況が思わしくないなか、現地のディレクターから活動報告が送られてきました。今年も現地では7月1～3日まで裁縫トレーニングが行われ、30人の参加者がありました。期間中に裁縫コンテストと女性のエンパワーメント・セミナーが同時に開催されました。全員がコンテストに参加し、布の裁断からミシンがけまでひとりで仕上げました。それらを現地の裁縫教師と、リグリマ委員のふたりが審査した結果、なんと1～3位までダイリパラ・グループのメンバーで占められました。3人の受賞者だけでなく、全員にプレゼントが贈られ、参加者たちはさらに励まされた様子だったそうです。

エンパワーメント・セミナーでは、イギリス人ボランティアがファシリティーターを務めてくれました。女性たちはすぐれた知性をもっているのに、つねにそれを隠そうとしていることや、育児・家事・仕事といくつものことをこなして物理的にはエンパワーされているのに、精神的にはまだまだエンパワーされていないこと、女性たちには両方のエンパワーメントが必要であることを学びました。

グループ討論ののちシェアの時間では、ロタさんが自分の所有する池のことを話しました。ロタさんはリグリマの相互扶助資金によって、池を再掘削したのち魚を養殖し、アヒルを飼い、収入を得ています。さらにその収益で自宅横に小さな雑貨店を開いて家計を維持しています。今年の2月、ロタさんはガロ・バプテスト教団初の女性牧師として按手を受けました。リグリマに精神的支柱が与えられたことによって、クリスチャンであるメンバーたちは精神的にさらに励まされていくことでしょう。

現地ディレクターであるラブリー・ダゼルさんの報告には、日本聖公会婦人会に感謝の言葉が添えられていました。

「わたしは開会のあいさつで、婦人会が送ってくださった手紙を読み上げました。このプログラムをつうじて変化の機会を与えてくださって、ほんとうにありがとうございました。わたしたちだけではプログラムを実施できなかったでしょう。参加者たちが裁縫トレーニングやセミナーに参加するだけでなく、お互いの痛みや喜びを共に分かち合うことは、家事に追われている女性たちにとってとても大切な時間です。みなさまのおかげでこのような機会を与えられたことを、全員が感謝しています。どうか、この国の状況のためにお祈りください。わたしたちはたえまない恐怖の中で暮らしています。みなさまの真心とご支援に感謝いたします」



絵：三原晶子

奉仕の精神

もうずいぶん昔の話ですが、私と私の家族が6人で英国で暮らしていた時のことです。私が副牧師として勤めていた教会の若い女性がデパートで働いていたのですが、夕方デパートが閉まる直前に来る人がいて、本当にいやだ、と言うのです。時間になれば閉じて、早く家に帰りたいという訳です。日本であれば、大事なお客さんですから、はい時間です、ではなくて多少時間が過ぎても丁寧に対応するのが普通です。英国人はサービス精神がないのかなあと思ったのですが、一方、町のインフォメーションセンターのような、無料の窓口には、ボランティアがいて、これは全く逆にとことん親切なのです。英語ができなくても、ていねいにやさしく時間をかけて教えてくれます。なるほど、と思いました。日本では「お客様は神様です」というように、サービスはビジネスの一環であって、お金にならないことには、得てしてあまり親切ではないかも知れないなあと思うのです。英国人はとっつきが悪い、という印象も、実は相手の主体性を重んじて、よけいなおせっかいはしないということで、ひとこと、「エクスキューズミー」と言えば、たとえ反対方向に歩いていても、途中まで一緒に歩いてくれた人もいました。旅人をもてなす心、助けを求められれば嬉々としてサポートしてくれるのです。

「仕事」と「ボランティア」については、永遠のテーマですが、仕事の中にもボランティア精神が生かされると思いますし、ボランティアだからと言っていい加減で無責任であってはならないと思うのです。教会や婦人会の働きは、まさに多くの方々のボランティアの心によって支えられているのです。

チャプレン 司祭 ヤコブ 三原一男

「難民・移住労働者問題キリスト教連絡会」



< 面会支援への参加と献品のお願い >

9月15日 東日本入国管理センター（通称：牛久收容所）に、「難民・移住労働者問題キリスト教連絡会」（難キ連）の事務局長 佐藤直子さんの元、司祭含め17名で訪問いたしました。

1 グループ3・4人に分かれ、面会時間は一人の収容者に付30分が許されます。収容者の生活状況、体調、希望等話を聞きました。難キ連の活動では、一人一人に適切な対応をし、ビザが切れてどうしたら良いか分からず警察に相談しに行ったらそのまま逮捕された青年の保釈や、ある日突然チャーター機で強制送還され日本に残された家族や子供たちのため、さまざまな問題解決に取り組んでいます。

家族を引き裂くチャーター機による予告なしの突然強制送還の回避を訴え、彼等の強い支えとなるお働きには頭が下がります。収容者への差し入れに以下の献品を募っています。ご協力をお願い致します。

報告者：土屋 晴子

* 金券(商品券、ギフト券、図書券、図書カード、クオカード、株主優待券、等) 未使用テレホンカード 切手、はがき、便箋、封筒、ノート、文房具、シャンプー、リンス、石鹸、歯ブラシ、歯みがき粉

<送り先> 〒110-0005 東京都台東区上野 1-12-6 3F

「難民・移住労働者問題キリスト教連絡会」宛

<連絡先> Tel: 03-5826-4915 携帯: 090-6012-8252 事務局長 佐藤



教区婦人会からの声

今回は、沖縄教区の婦人会長より寄稿いただきました。沖縄教区は一つの県で構成されていますが、離島も多く、抱えている問題も多い県と思われます。その中で、各地域の方が心をつ一つにして、教区婦人会の働きと共に、日本聖公会婦人会の活動をご理解下さり、ご協力いただいていることに、大きな力を感じました。日本聖公会婦人会・感謝箱献金は、今後も皆さまより送っていただいている尊い献金を、よりよい働きへと用いていただくため、総会・会長会にて審議し、国内外の支援先にお献げしてまいりたいと思います。

「教区婦人会の一員として」

沖縄教区婦人会 会長 エリザベツ 真栄城美子

沖縄教区には12の教会があり、9つの教会に婦人会があります。

婦人会へ加入していない教会でも、婦人会研修会への参加や諸献金へ心おきなく協力して下さっています。感謝です。沖縄教区は、沖縄県一教区として、聖職者たちは勿論のこと、信徒同士も交わり、関わりが深いものです。また、沖縄教区の諸行事、諸活動へ参加することで、教会は違っていても、信徒同士は顔なじみであり、会うとすぐ神の姉妹として親しく交わることができています。しかし近年、信徒の増加が少なく、信徒の高齢化に伴い後継者を育てることが難しくなっているようです。

これまで1つの教会単位で教区婦人会本部役員を担ってきた時期もありましたが、その後隣接した2つの教会が協力して婦人会教区本部として頑張っていました。しかし、数年前から、沖縄本島、離島を合わせて南部、中部、北部と3つのブロックに分けて、各教会から教区婦人会の役員をして頂いています。教区婦人会研修会は勿論のこと、毎年教区会へのご奉仕、教区の諸行事への協力、参加をされており、それとともに日曜学校、聖職候補生たちへの支援など微力ながらお手伝いをさせて頂いています。

教区婦人会は、任期期間2年を1期としており、去年は、会計の島田さんとともに日本聖公会婦人会の会長会へ出席させていただきました。今年の総会へは次期本部役員を引き受けて下さる知花阿佐子さんと出席致しました。各諸報告を受けた後、それぞれの献金の奉獻先と使途についての審議に関わることで、出席なさった方々の熱いご意見に圧倒されながらも、献金の意味について深く考えさせて頂く機会となりました。殊に、毎年お献げする感謝箱献金の使途については、スタッフの皆さんが間違いなく正しく使われていることとして、お任せ状態で何も気にかけていませんでした。

感謝箱献金のお献げ先の基本姿勢、原則として、社会の中で生命や存在を危うくされている国内外の人々、特に女性や子どもたちの自立を目指すための働きに献げるのですが、献金を送金するだけでなく、お献げ先について話し合いを深くし、吟味して決定していく。それから、お献げ先の人たちと互いに顔が見える関係を築いていくことに重きをおいていることを知りました。しかも、緊急援助の時は、原則によらず、1件につき50万円を限度として、日聖婦役員会とコア（感謝箱献金事務局）とで協議し、決定し支出ができるという柔軟な姿勢があることも知りました。日本聖公会婦人会とコアの働きに感謝するとともに、その働きをもっと多くの方々に伝えていかなければと思いました。

感謝箱とわたし

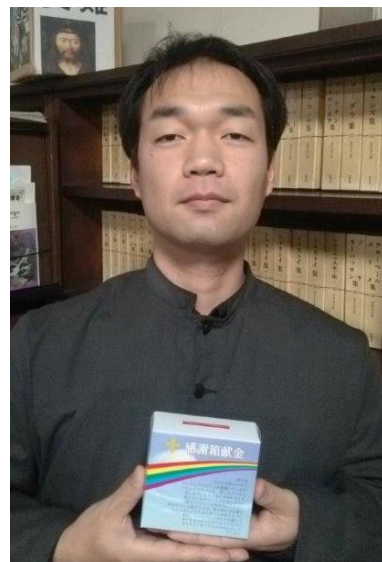
神学生 ルカ 柳原健之

今回「感謝箱とわたし」の執筆の依頼をいただき、初めてこの箱のことを認識いたしました。おそらく今までにも教会や家の中で目にはしていたと思うのですが、それは単なる目に入ってくる光の情報でしかありませんでした。生まれてからこの箱を知るまでに二十何年かが過ぎ去っていったのでありますが、その間にも感謝箱の働きは続けられ、国内外の困難の内にある多くの人々を支えてきていました。

さて、この感謝箱献金、もともとは「一致献金」と呼ばれていたようです。「一致」の意味までは探すことはできませんでしたが、おそらく皆が一つに合せられていくことが考えられていたのではないかと思います。

本田路津子さんの「一人の手」の歌詞にもあるように、私たち一人一人の働きは弱く、様々なところに目を向けるのは難しいことです。しかし、皆が集まればより広い視野をもって、何かができるのです。そして、何かをなした先に皆が強められていくのです。このことはまさに感謝箱献金の働きです。この働きを通して私たちは一つにさせられるのではないのでしょうか。その意味で言えばこの箱は、一つであること、共同体の象徴なのかもしれません。

毎回の聖餐の中で私たちは「感謝と賛美は私たちの務めです」と唱えています。このことを真摯に覚えながら、遅ればせながら私も感謝箱献金の働きに参加し、一つに合せられていきたいと思っています。



プロフィール
出身地：京都
特技：菓子製作
趣味：プラモ作成
大学卒業後、トイレのメンテナンス会社に就職。2014年にウィリアムス神学館入学。

感謝箱献金は来年 125 周年を迎えます

感謝箱献金の働きは、米国聖公会の婦人たちによって 1889 年に始められた UO (united offering＝一致献金) がその原型です。本国アメリカでも大切にその活動は受け継がれ、一昨年創設 125 周年を迎えました。この機会にさらに多くの人に知ってもらい、つながってもらうため、復刻版の献金箱が作られるなど趣向を凝らしたプロモーションがおこなわれています。UO(一致献金)は当初、3 年に一度の総会で集められ、一部のお金持ちの高額献金に拠るところの大きい献金でしたが、より広く多くの教会婦人に呼びかけ、少額であっても、誰もがいつでもその輪に加わることができる献金運動を理想とし、1919 年には「婦人信徒の心を合わせた感謝の捧げもの」であるとの思いを確かにし、その呼称を「UTO」(united thank offering＝一致感謝献金)と改め、現在のような大きな献金活動に発展しました。パンフレットやホームページでは、米国聖公会が国内と海外の伝道活動を進めるうえで教会婦人の大きな支えがあり、その支えのもとで実現した数々の働きについて紹介されています。

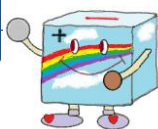


Mary Abbott Emery

日本聖公会婦人会の歴史にお名前が刻まれた方々、殊に「メリー友の会」にそのお名前をいただいた、メアリー・アボットさんの功績についても、WA(※米国聖公会伝道活動の補助のために任命された専従女性秘書を指す)の発足当初、たった一人で尽力され、4 年の在任期間で全米の教会の選任担当者との強いネットワークを構築したことが語られ、他にも日本への女性伝道師派遣についての協議がなされたことや、日本でのミッション(女子聖書学校や教会、病院、教育施設の建設や運営)に幾度も「UTO」(一致感謝献金)が用いられてきた記録などをみることができます。これらの方々を介し日本に伝えられた献金活動は、明治 25 年に小宮珠子姉らによって祈りと献金で伝道を支える活動として、女性伝道師リサ・ラベルさんやマキム主教夫人らのお力をかりながら日本中に広がり、その運動を軸として婦人伝道補助会(現在の日本聖公会婦人会)が組織されていきました。

来年(2017 年)は日本でも感謝箱献金活動が 125 周年を迎えます。神さまのお導きのもと、この先も皆さまにお覚えいただきながら、小さくされた方々と共にあって、喜び、互いに祈りあうことができますように。感謝の気持ちを新たに記念する年となりますように。





聖公会神学院をお訪ねしました

10月7日(金)、コアのチャプレン・三原司祭と運営委員長とスタッフ2名は、東京世田谷区・用賀にある聖公会神学院を訪問し、PRと交流の時間を持つことができました。

コアへのご理解とご協力をお願いするため、忙しいスケジュールの合間にこのような時間を設定して下さった、司祭・佐々木道人校長と、集まって下さった神学生の方たちに感謝申し上げます。

現在、神学院には北海道教区より沖縄教区まで7名の神学生が在学されています。年齢も様々ですが、将来きっと素敵なお教役者になれる方たちとの出会いでした。神学生の方たちは、今、真剣に勉学に励み、知識と信仰の成長と共に卒業されたのちは各教区での聖職候補生としてさらに経験を積み、その後は教役者として、各教区で、さらに日本聖公会の今後の担い手として、私たち信徒を率いて下さる方たちです。日本聖公会婦人会の感謝箱献金の歴史や働きについても、新しく信徒になられた方、若い方、男性の信徒に説明し、ともに考えていただくことで、感謝箱献金の活動を継続していただきたいと願い、パワーポイントを用いて、米国聖公会より明治26年に伝えられたこの(感謝箱献金)運動の日本に伝わる経緯を含め、米国での変遷、さらには日本に伝わってからの歴史などをまとめてお伝えしました。続いて2016年度にお献げ先となったグループ・施設・積立金についての状況などの説明をし、資料として「ガリラヤのほitori」バックナンバーと「ハンドブック」、そして感謝箱をお渡ししました。

神学生の方たちが真剣に静聴して下さい、質問とともに親しく交流できたことは、きっと神様が用意して下さいました機会だと力強く感じた時間でした。

報告者 古谷美子



神学生の皆さま、ありがとうございました



編集後記 ◆

「ガリラヤのほitori」25号をお届けすることができ、寄稿いただいた方、お献げ先からの報告をして下さった方に感謝いたします。6月の日聖婦総会において、北関東教区が役員教区に選ばれ、京都より移行いたしました。京都の役員の方には3年間いろいろと有難うございました。今号もお献げ先からの近況をお知らせいただき、感謝箱献金からお祈りとともにお献げした支援金が、有益に使われていることを知り、心が通い合ったようで嬉しく思っています。感謝箱献金の運動は日本でも来年は125年を迎えます。教会の先達のご婦人たちが、心身を尽くして守り、祈り、継続してこられたこの働きを、今後も続けていくことは今ある私たちの務めだと思っています。他人事でなく、教会に連なるご婦人たち(男性の方も)が、日々の感謝を献金の形をもってお献げ下さいますことを切望しています。

(古谷記)

